

ヨハネ伝21章18-19節 「若さに対する挑戦」

1A 望みが多くても、制約のある世代

2A 理解できぬ出来事

3A 多くを持っている若者

4A 主を恐れる行動

本文

今回のキャンプのテーマは、「若さにおける制約」に注目したいと思います。まず初めに、ヨハネ21章18-19節を読みます。「まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現わすかを示して、言われたことであつた。こうお話しになってから、ペテロに言われた。「わたしに従いなさい。」

1A 望みが多くても、制約のある世代

このイエス様の言葉に、世間が考える若さとイエス様の見る若さの違いが表れています。イエス様が、ペテロに対して語られたのは、ここでの背景はペテロがガリラヤ湖で漁にしにいくと言ったことです。彼が漁に行くというものだから、他の弟子たちに漁に行きました。けれども、その夜は何もとれませんでした。そして夜が明けたら、イエス様が岸边におられて、食べる物がないですねと言われました。そして、「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」と言われたのです。すると、網を引き上げることのできないほどたくさんの魚が網にひっかかりました。そして、ペテロが気づいたのです、「主です」と叫びます。そして岸边に上がると、イエス様が炭火で魚を焼いていて、パンも用意しておられるのを見ました。

そして、食事を済ませた時にイエス様は、「あなたは、これらのもの以上に、わたしを愛しますか？」と尋ねます。新改訳では、「この人たち以上に、わたしを愛しますか。」となっていますが、「これらのもの」と訳すこともできます。つまり、そこに大量の魚、153匹の魚があつて、それら以上に愛していますか？ということです。愛していますとペテロが答えると、「わたしの羊を牧しなさい。」と言われたのです。これが三度続き、それでイエス様が今の言葉を言われました。つまり、ペテロにとって漁をすることは、自分の歩きたい所を歩くことでした。帯を締めるというのは、一枚の布で作られていた服を、下の部分をまくることによって動きやすくするのですが、要は自分で自分のしたいことをやっていく、ということです。これが、彼のこれまでの人生でした。けれども、ペテロが漁をしていた時に深みに漕ぎ出しなさいとイエス様に言われて、大漁になって、それで自分が罪人であるとペテロが言った時に、イエス様に「わたしについて来なさい。」と言われて、やりたいことを捨て

てついていったのが、ペテロでありました。今、またそこに戻ってしまいそうになっているところで、イエス様が改めて、ペテロを福音を伝える働きに、教会を建て上げる働きに任命されたのです。ですから、彼のしたいことを行なっているというのが、その若さの特徴でした。

けれども、漁師から羊飼いになること、つまり今までの自分のしたかったことをやっっていくのではなく、イエス様に言われたことに応答して、それに付いていき、従っていくことを、「年を取ってから」とイエス様はここで言われています。イエス様は、「あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」と言われました。これまでは自分が帯を締めていました。年を取ってからの大きな違いは、「自分の手を伸ばす」ということです。ほかの人が自分の帯をしめるのを、任せてしまうことです。彼の場合は、このような形で殺されるのだということです。聖書ではなく、初代教会の指導者の記録ですが、ペテロは十字架刑に処せられたのですが、彼は主と同じように殺される資格はないとして、逆さ磔を自ら申し出たと言います。逆さ磔にされて殉教しました。

このように、自分が年を取ることが、自分が望んでいないところだけでも、そこに連れて行かれることだと言います。私が、キリスト者になったのは 19 歳のことでした。そして、この箇所を読んで、重々しくなりました。年を取るといことは、このように制約を受けることなのだと思います。ところが間違いでした。若者のほうが、自分のしたいことをしているようでいて、実は制約を受けていて、年を取ることによって自分のしたくないことに任せていくことによって、かえって自由にされているという原則が分かってきました。

ペテロのことを思い出してください。彼が地上に歩まれるイエス様に従っていた時は、何歳だったのでしょうか、30 代だったかもしれません。彼は若かったのですが、しかしイエス様が、「あなたがたは、わたしのゆえにつまずきます。」と言われた時に、「たとい、ごいっしょに死ななければならぬとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。(マタイ 26:25)」と言いました。けれども、イエス様が、「心は燃えていても(あるいは、霊はそのように願っていても)、肉は弱いのです。」と言われたように、彼は物の見事に、「あなたはイエスの仲間だ」とちょっと疑われただけで、三度、私は知らないと言ったのです。ペテロは、自分が強くしたいと願っていることがありました。けれども、肉の制約を受けてそのしたいことどころか、憎んでいることを行なってしまうしました。

しかし、晩年のペテロは違いました。彼の様子は、ペテロ第二の手紙に出てきます。「1:13-14 私が地上の幕屋にいる間は、これらのことを思い起こさせることによって、あなたがたを奮い立たせることを、私のなすべきことと思っています。それは、私たちの主イエス・キリストも、私にはつきりお示しになったとおりに、私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。」この幕屋とは、もちろん自分の肉体のことです。ペテロは、自分の体に対してしがらみがあり

ませんでした。そして、主から命じられていたこと、すなわち教会を建て上げることに集中し、自由にそれを行なうことができていたのです。彼は肉体的制約は受けていましたが、若かった時よりはるかに超えて、自由に生きていました。

最近、私が少し気に留まっていた人で、久米小百合さんがいます。1979年に「異邦人」という曲でレコードが140枚売れるという、大ヒットを記録しました。久保田早紀という名前で出ていたのが、なんと芸能界で音楽活動をしていたのは5年ぐらいでした。しかし、その後、信仰を持ち、洗礼を受け、それから神学校に入り、ミュージック・ミッションナリー、すなわち「音楽宣教師」として奉仕を続けています。そして毎日新聞の彼女を取材した記事の題名が好きでした。「人生は夕方から楽しくなる」です。彼女は来年で還暦を迎えます。異邦人が大ヒットした時は20歳そこそこだったのですが、40年経った今のほうが楽しいということです。¹

そして、NHKでの番組でも興味深いことを話していました。彼女は「異邦人」という曲に、否定的な思いを抱いていました。いつも、芸能界で生きていた時の久保田早紀を否定して、教会で人を救いに導こうと祈りつつ音楽を奏でる久米小百合でいたいと願っていたようです。教会の中でも異邦人を弾いてくれというリクエストが来るのだそうです。「異邦人」は日本語では普段使われないのに、聖書には100回、200回も出て来る。神を知らない人という意味なのだが、自身が神を知らないうちから、その曲の題名の歌をうたっていた。自分が異邦人だったのでは？つまり、芸能人でも合わない、キリスト教の世界でも、牧師や伝道師の中で全然違う世界から来て、自分自身が異邦人のような世界を歩んでいたのではないか？ずっと背を向けていた曲だが、今は「大切にしろ」と言われているような気がする。」というようなことを話していました。²このようにして、自分に足かせのようになっていたと思いついていた自分の曲が、神からのプレゼントだったということに気づき、自由に歌えるようになったということです。

私たちの生きている世では、家父長制度が壊れた近代社会では、人生の頂点は20代であるとされています。そこから衰えが起こって来ると言われますから、それで人々が何とかしてその20代の時の若さを如何に保ってられるかを競い合うようになっています。しかし聖書は、老いていくことに対してとても積極的です。例えば、白髪については「箴言 20:29 若い男の光栄は彼らの力。年寄りの飾りはそのしらが。」とあります。そして、「16:31 しらがは光栄の冠、それは正義の道に見いだされる。」とまであります。それはどうしてか？私たちが主を知るといことは、老いることはないからです。主を知るといことは、日々新たにされていきます。外側が衰えても、内なる人は新しくされるからです。「2コリント 4:16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」

¹ <https://mainichi.jp/articles/20180126/dde/012/070/008000c>

² <https://youtu.be/6DuHXq4rwGO>

そして晩年に、一つの書を書いた人がいます、ソロモンです。彼は若い時にいろいろなことをやりつくした後で、若い人たちに次の助言をしています。「伝道者 12:1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。」その若さの中で自分が心のおもむくままに、目の望むままに歩めば、そこに何の喜びもない年月が続いていくということです。だから、創造者を覚えよということですが、彼のこの書を書いた結論が書いてあります。「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。その命令を守れ。これが人間にとってすべてである。(12:13)」主を恐れるということが、若い時の鍵になるのですが、それはまた後で詳しくお話しします。

2A 理解できぬ出来事

今日はまるで、若者に対する励ましというよりも、年を取っている人々に対する励ましのようになってしまっているかもしれません。けれども、そうではなく人生というものを神がどのように見ておられるかを、そのまま、ありのままに見ることによって若さという者に対する挑戦を、御心にしながら応答していくためであります。

主との歩みというものが、時を経るごとに新しくされていく、主を知っていくことになるからということであれば、今の自分には、神が人生におけるご計画を実現されるその過程にいるということができるよう。したがって、自分の理解を超えたことが起こる、「なぜこうならないといけないのか？」ということが起こります。そして、その逆説的に見えることを、それでも主がここにおられると信じて歩む人々の手本が聖書にはたくさんあります。その代表的な人物を何人か挙げてみましょう。

ヨセフがいます。ヤコブの十二人の息子の一人ですね。ヨセフは 17 歳の時に、すでに自分がどのようになるのかを、夢によって示されていました。彼が、兄たちの上に立ち、指導者になるということです。いや、父ヤコブや母よりも上に立つということも示されていました。畑で、収穫が終わって、束をたばねていると、兄たちの束がその束におじぎをしたという夢です。そして、もう一つは太陽や月、また十一の星が彼にひれ伏しているという夢です。しかし、そのように示されていたのに彼が受けた仕打ちは、兄たちによって穴に投げ入れられ、しかもエジプトに奴隷として売られていったということです。それから、彼はポティファルの家で仕えて、主人にも気に入られましたが、妻が寝ておくれと言い寄って来たために、彼はそこから逃げた所、妻の方が自分が襲われそうになったのだと嘘の告発をして、それで彼は牢屋に入れられます。

しかし、彼には賜物が与えられていました。知恵の賜物が与えられ、そして人々を治め、物事を管理する賜物が与えられていました。なので、ポティファルの家でもそうでしたが、なんと監獄の中でさえ彼は、監獄の長の信頼を勝ち得て、鍵が渡されて、他の囚人の世話までをしたのです。そしてパロに仕える二人の男が夢を見たというので解き明かしたところ、一人はパロのところに戻り、もう一人は木にかけられて殺される、死刑にされるという解き明かしがその通りになりました。そし

て、二年がたちます。そのパロのところに戻るといふ人に、自分は不当な理由でエジプトに連れてこられたし、またここに入る罪も犯していないことを話しました。ところが二年間、彼は忘れていたのです。それで、二年後にパロ自身が夢を見て、それでその男が思い出してヨセフをパロの前に連れてこさせました。ヨセフは、七年間の大豊作と、次の七年間の大飢饉を言い当てました。それだけではありません。その大飢饉に備えて、初めの七年間で穀物を備蓄するように監督者、行政官を置いてくださいと助言したところ、パロがあなたこそがそれにふさわしいとして、ヨセフをエジプトの総理大臣にしたのです。

しかも、それだけで彼の人生は終わりませんでした。その大飢饉が来た後で、ヤコブの家から食糧を買いに兄たちがヨセフのところに行って来ました。ベニヤミンを身届け、兄たちの心が変わっていることを確かめて、それで初めて自分のことを明かしました。彼らに赦しを与え、またヤコブの家が飢饉で滅びることなく、救われるようにエジプトに移住することまですることができました。こうして、主がヨセフに与えられた賜物、恵みの賜物を十分に用いるようにさせて、ご自分の計画を進めておられました。彼が兄が自分たちを売ったこと、その悪について、主がその背後におられたのだ。主が、エジプトに自分を遣わされたのだと知ったのは、ずっと後のことです。もちろん、初めの頃、17歳から30歳過ぎまでの10数年間は、自分がなぜこんな目に遭ったのか、さっぱり理解できなかったでしょう。

次にモーセもいます。彼も似ています。パロがイスラエル人を苦しめ、ついにその男の子の赤ちゃんをナイル川に投げ入れろという命令までが出ました。しかし、モーセはかごに入れて隠され、ナイル川のところに浮かばせて誰か見つけてくれないか待っていた所、なんとパロの娘が来ました。彼女がモーセを自分の養子にすると決めたのです。こんな戦略的なところに、モーセは置かれたのだと思いました。モーセには、神の思いが与えられていました。イスラエルの民を奴隷の苦しみから救い出すという思いです。今の宮廷にいるという地位こそが、主が自分を、彼らを救うための器として用いられるのだと思っていました。ところが、彼が40歳になった時にエジプト人に虐げられているイスラエル人を救おうと思って、エジプト人を打ったら死んでしまいました。そして、今度はなんと、イスラエル人がイスラエル人を虐げています。それで間違っていると思われる方に話したら、「おまえは、なぜ裁き司のように振る舞うのか？あのエジプト人のようにしたいのか？」と言いました。モーセは自分がエジプト人を殺したことがばれているのを知り、エジプトから逃げたのです。

イスラエルを救うというのは、自分が神から与えられていた使命だと思ったのに、まるで失敗したという挫折感、絶望感だけを味わい、そこから四十年、40歳から80歳まで荒野で、ミデヤン人イテロの下で羊飼いとして働いていたのです。彼がまさか、エジプトに戻ってパロに主の言葉を告げて、それで彼らを連れ出して、この荒野にまで、またホレブの山にまで連れて来て、主が降りてこられるのをイスラエル人に見せることなど、考えられたでしょうか？彼もまた、全く理解できない

過程を通った一人でした。

ダビデはいかがでしょうか？もう、感づいた人はいるのではないのでしょうか、ダビデはゴリヤテと戦って大勝利を治め、サウルの下で仕えるようになりましたが、サウルがダビデを妬み、彼を殺そうと思いました。主人から、また舅から命を狙われる身となりました。サウルは、自分が王位から退けられたことをサムソンから告げられていました。そして、どこかでダビデがイスラエルの王になることも、知っていました。ダビデは逃げていましたが、そこには御霊に感動して逃げている彼のところに集まって来る者たちがいました。全く垢の他人であるアビシャグまでが、彼が王になることを前提に、自分の夫に対して仕返しをしないように気を使って助言をしました。ダビデは、サウルを二度、手を下すことのできる機会がありました。けれども、彼は敢えて殺しませんでした。油注がれた人を殺すことなど、決してできないと言いました。気づいたサウルは、こう言っています。「あなたが必ず王になり、あなたの手によってイスラエル王国が確立することを、私は今、確かに知った。(1サムエル 24:20)」

そしてサウルが、ペリシテ人との戦いで敗れます。ダビデはヘブロンで王としてユダの民に立てられ、サウルの息子イシュ・ボシェテが死ぬと、イスラエルの民はその国をダビデに渡し、ダビデは全イスラエルの王となりました。ヘブロンにおいて三十歳で王となり、四十年間王となっていました。しかし、ダビデは若かった時はサウルから命を追われる身だったのです。その時に歌った数多くの歌が、詩篇の中にあります。どうしようもないうめきと叫び、救いを待ち望む歌は、彼の若き日の苦悩だったのです。

そして、私たちの主イエス様が、これまでの神の人たちの代表とも言うべき生涯を全うされました。キリストであり、神の御子であるにもかかわらず、敬われず、かえって蔑まれ、頬を打たれ、鞭打ちにあい、釘を打たれて十字架に付けられました。イエス様が苦悩しなかったかという、していました。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。(マタイ 26:39)」イエス様は苦しみを受けることについては、理解していました。しかし、御父からの怒りの杯を受ける、そして神から引き離されるということが耐えがたいことだったのです。それで、過ぎ去らせてくださいと祈られました。イエス様の地上での生涯は、栄光の姿に戻られるまで、御父のみもとに戻られる前のことであり、ある意味、若者の道を歩んだと言えるでしょう。イエス様は、神の子だから学ぶことがなかったということではありません。いや、むしろ人となられたので、人として父に従う従順を学んだのです。「ヘブル 5:7-9 キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、彼に従うすべての人々に対して、とこしえの救いを与える者となり…」イエス様は、敢えて人となられて、人として学び、人として従順を知りました。ここに、若者が生きる道があると

えるでしょう。

3A 多くを持っている若者

このようにして、理解できない期間があるのだということを見てきました。若者というのは、望みがあって期待があって、それを自由に全うできるから若々しいのだ、それがすばらしいのだと世で教えられているのですが、そうではないことが分かりましたね。むしろ聖書には、初めの時に多くを与えられ、それからその与えられたものを台無しにした人々が出てきます。

先ほども出てきたサウルがその一人です。彼は美男子で背も高く、そして決して横柄な人間ではありませんでした。アモン人との戦いの時に神が御霊で満たしてください、彼は勇敢に戦いました。彼のことを馬鹿にする人たちもいましたが、彼はその人たちを赦しました。いや、もしかしたら傷がついていたのかもしれませんが。そして、サウルは戦いますが、なかなか自分に兵士たちが付いて行かないので、無駄な誓いを立てさせました。何も食べてはいけないとさせました。けれども、信仰によって動いたヨナタンによって、大勝利を治めますが、彼ははちみつを食べたがゆえに、サウルは何と誓いを破ったということで、息子を殺すとまで言ったのです。その前に、サウルはサムエルが来ないので、自分で祭壇でいけにえを捧げることさえしました。そして、アマレク人を聖絶せよという命令に背き、王アガグをいけどりにして、家畜も最良のものを残していました。自分の記念碑まで作っています。そしてサムエルが、「そむくことは占いの罪、従わないことは偶像礼拝の罪だ。(1サムエル 15:23)」と預言したように、彼は最後のペリシテ人との戦いで、なんと魔女を呼び寄せて霊媒をさせたのです。若い時に持っていたのに、最後は失ってしまったのです。

もう一人は、ソロモンです。彼も若き時に、主から知恵を与えられ、また富も与えられました。「神は彼に仰せられた。「1列王 3:11-13 あなたがこのことを求め、自分のために長寿を求めず、自分のために富を求めず、あなたの敵のいのちをも求めず、むしろ、自分のために正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたので、今、わたしはあなたの言ったとおりにする。見よ。わたしはあなたに知恵の心と判断する心とを与える。あなたの先に、あなたのような者はなかった。また、あなたのあとに、あなたのような者も起こらない。そのうえ、あなたの願わなかったもの、富と誉れとをあなたに与える。あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者はひとりもないであろう。」ソロモンは主を愛し、父ダビデのおきてに歩んでいた(3:3)とあります。けれども、彼がこれだけの多くの知恵と富が与えられている中で、主ご自身のものを愛するというのが何なのかが分からなくなっていました。そして彼は、重税を住民に課すようになり、また女を沢山愛しました。700人の妻、300人のそばめです。それで彼の心は主を離れ、女たちに向かい、それでその異邦人の女たちの神々の宮をエルサレムの周りに建て始めたのです。「主に従い通さなかった」という言葉があります(1列王 11:6)。

サウルの場合の問題は何だったのでしょうか？彼は、主の召しが初めから分かっていませんで

した。王のふりをしていましたが、主から命じられて、主の言われていることに従うということではありませんでした。真面目な人でした、けれども、その単純なことができていなかったのです。主から何が言われているのかが初めから分からなかったら、年を取れば必ずそれらは悲しみとなっていきます。神の召しを知ることは大前提です。次に、ソロモンの場合はどうでしょうか？彼は、世の思い煩いで召しを全うできなかったことです。彼は召しが分かっていたので、だから主に応答して、それで主がふさわしい力と知恵を与えられました。けれども、どこかで世の思い煩いが入り込んで、忠実ではなかったのです。神の召しを知るだけでなく、それを全うする忠実さが必要です。

4A 主を恐れる行動

そこで私たちは、主を恐れるということを考えてみたいと思います。主を恐れるとは、自分には全く理解できなくとも、それでも主が言われているということだけで、それに聞き従うという、主に対する敬いです。「心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。(箴言 3:5-6)」

若い人を取り上げてみましょう、イエス様の義父ヨセフです。彼は、許嫁のマリヤが妊娠したことを知りました。これはあまりにも衝撃です、気が狂いそうだったでしょう、そしてユダヤの律法にしたがえば、彼女を石打にしなければいけません。不品行の罪を犯したのですから。そして彼は、「彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。(マタイ 1:19)」とあります。けれども、御使いが夢の中に現れて、「恐れなくて妻マリヤを迎えなさい。聖霊によって宿っているのだ。男の子を生むがイエスと名づけなさい。」と言われたのです。そして、眠りから覚めて、そのままマリヤを自分の妻に迎え、驚くことは、「子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。(マタイ 1:25)」と言っているのです。だれが、結婚しているのに夫婦関係を持つことを控えるのでしょうか？しかし、聖霊によってみごもったこと、それを証するために、主の命令に従って夫婦関係を持つことを控えたのです。これはちょうど、洪水どころか雨も降っていなかったであろう時に、箱舟を何年もかけて造ったノアと似ています。ただ主が言われたということだけで、全く理解できないのですが、そのまま従うのです。

いかがでしょうか？若者に与えられた制約と挑戦、チャレンジについて見てきました。次のセッションは、若者テモテに対してパウロがどのような助言を与えているかについて見ていきます。